

試し読み版

# 私立探偵 ヌビナ



大熊狸喜

表紙イラスト：恋河ミナル

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『私立探偵マヒナ』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



# 私立探偵 マヒナ

大熊狸喜  
表紙／恋河ミノル

# 登場人物紹介

## Characters

---

いずも

### 出雲マヒナ

名探偵ホームズに憧れ、事務所を立ち上げた女探偵。その腕は確かだが、かなりのドジっ娘でもある。

あか い いちろう

### 赤井一郎

ハンサムで行動力も才能もあり世間の評判は良いが、マヒナが最も嫌いな男刑事。

「もうっ、汗と埃でベトベトだわっ！」

昼下りの閑静な住宅街。都心から少し離れたマンションの入室「出雲マヒナ探偵事務所」では、帰宅したばかりらしい一人の女性がプリプリと怒りの湯気を立てていた。

タイトなスカートとピッタリフィットのスーツに身を包んだ、二十三歳の女性私立探偵出雲マヒナは、事務所の奥にある自宅で埃にまみれたスーツを手早く脱衣してゆく。

「クリーニング代だつてバカにならないのに、ああ……早くシャワー浴びたい！」

水色スーツの下からは豊かに胸部の押し上げられた純白ワイシャツと、細く括れたウエストで留められているスカイブルーのタイトスカート。

柔乳を包む大きなカップのブラは、白いお尻肌を包むTバックの下着と同じ薄いピンク色で統一されている。

「シャワーシャワー、るるるん☆」

シャワーの前ではご機嫌斜めも直るようで、全てを脱ぎ捨て全裸になったマヒナは鼻歌混じりで湯と戯れ始めた。

フワリと広がる、左わけに切りそろえられた栗色の前髪と、肩胛骨まで伸ばされたセミロングの揃い髪。年齢の割に童顔な顔は小さく、大きな垂れ目と高く通った鼻、キュッと締まった小さな唇は、高校生にも見えるほどの愛顔だ。

コックを捻ると頭上の蛇口から細い温水が数条に噴き出して、染み一つなく起伏に恵ま

れた白い肌の上を濡れなぞりながら流れてゆく。

百五十九センチの身長に、九十六センチのGカップ柔双乳がタプリと揺れる。小玉スィカのように実った二つの乳房は若い張りを見せながら重力に負けず上を向いていた。乳輪は小さく更に先端の乳首は桃色でツンと小さな自己主張をしている。頭髮を掻き上げると引き上げられた乳房は柔らかく変形をして、更に深く柔谷間を演出した。

細い背中と肋骨からは更に細い五十七センチのお腹へと続き、八十九センチのお尻へと緩やかな広がりを見せている。自然に身体を捻る度に、背中から脇、お腹から引き締まった下腹部へと続くラインが柔らかくくねられて艶を浮かせた。

処女丘の恥毛は案外薄く、ピタリと閉じ合わされた桃色の処女媚構を流れるお湯は、深いお尻谷間から肛門を流れるお湯と股下で合流をする。更に女探偵の肌を流れる湯は柔肉の乗った内腿から丸いヒザ、キュッと締まった足首までの汗を綺麗に洗い流してゆく。

こんなに見事なプロポーションをしているからか街を歩くと百メートルとおかず、いかにも身体目当てのナンパを受けたり、A Vのスカウトを受けたりする。しかもなじみの情報屋に至っては、情報料は身体でどうか、などと失礼な話を持ちかけてくる者までいる始末である。みんなマヒナの身体をご馳走か何かと勘違いしているようだ。

「探偵なんかよりも絶対A V嬢の方が向いてるよ、僕に監督としてのチャンスをくれ！」  
などと言われて思わずパンチをくれてやった事もある。

一通り汗を洗い流してサッパリした女探偵は、膝丈の短めな純白バスローブに裸身を包むと、足早に事務所へと向かった。デスクの椅子に腰を掛けるとローブの裾が捲れて暖かい腿が露出して、身体を屈ませると前合わせでは胸の谷間がムッチリと押し合わされる。パソコンを開いて習慣になっているメールチェック。本日の依頼、さっきの一件。

「今日の収入を金庫に収めて、ちゃんと記録も付けておかないと」

行方不明の子猫を探して届けて、お礼は一万円。相手が子供だから仕方がないが。

「世界一の名探偵、出雲マヒナの仕事が、埃にまみれての子猫捜しだなんて……いいえ、困っている子供を助ける事だつて、名探偵の大切な使命なのよっ！」

礼金だつて実のところ、子供の母親の氣遣いである。自称世界一の名探偵は一瞬ガックリと肩を落とすも、すぐにやる氣の炎が燃える瞳を天に向ける。何があっても落ち込まないのが、女探偵出雲マヒナの良いところであつた。

「いつかあたしも、憧れの名探偵ホームズ様のような世界一の探偵に——ん？」

いつものように栄光の妄想に浸っていると、勝手に事務所のドアが開かれた。慌てる探偵の前に姿を見せたのは、ネイビーブルーの高級スーツをキッチリと着こなす、眼鏡を掛けて知的でガッシリとした長身な男性だつた。

「まだ昼下がりだというのに、もうシャワーとは……看板通り『いつもヒマな探偵事務所』だな、ここは」

あかいいちろう

赤井一郎、二十四歳。背が高く切れ長の鋭い視線を持ち、若いのに優秀で責任感があり、使命感と正義感に燃えていて弱者の味方という、刑事の中の刑事。

そしてマヒナが最も毛嫌いしている男である。同じ年に警察の試験を受けてマヒナは不合格、赤井は合格。更にマヒナが探偵学校に通っている頃赤井はメキメキと頭角を現し、若くして捜査主任に任命されるまでに至っている。しがない、そして自惚れの強い探偵女にとつてはまさしく勝手に目の敵、強烈に片嫌いしている相手であった。

『出雲マヒナ探偵事務所』よつ——ててつ、ていうか赤井一郎っ！ 何よつ、刑事のクセに勝手に鍵開けて入ってきてつ、住居不法侵入よつ！」

「鍵が開いていたから注意をしに上がって来てやったのだ、有り難く思え」

「ぐ……」

しかも言う事は正しいしウソもつかない。人々からも礼儀正しい頼れる刑事さんと評判なのに、マヒナにだけはなぜか尊大な態度で上から見下ろし、しかも毎日のようにからかいにやってくるのだ。今日も勝手にソファに座り、腕組みに脚まで組んでいる。

「大分ご機嫌斜めだな。いつものように身体目当てのナンパをされたか、はたまたA Vのスカウトをされたのか……ああ、またぞろ家賃代わりのデッサンモデルか？」

「そつそれは昨日——あわわ！」

ウツカリ口が滑る探偵というのもどうかと思うが、これもまた事実であった。マンショ



ンの大家さんは美術大学で教授を務めている老人男性であり、収入が少なく不安定なマヒナは家賃を払えない月がよくある。そんな時、女探偵は大家さんの命令で、大学でのデッサンモデルにかり出されるのであった。

課題はいつもヌードデッサン。多い時には月六回、マヒナは年下の男子学生たちの前で全裸になって愛顔や豊乳や先端媚突、それにお尻や極薄い恥毛、更にポーズによっては媚肛に至る隅々までを、多くの学生にじっくりと観察されて入念に写生されるのである。

不特定多数の年下男性の前で全裸を見せるなんて、処女膜はないが男性経験もないマヒナには恥ずかしくて仕方がないのだが、マンションを追い出されて路頭に迷うなんて絶対にいやだ。大家さんの温情に縋るしかない女名探偵である。

あきれたような仕草で溜め息を吐く、わざとオーバーアクションの眼鏡若刑事。

「ヌードモデルをさせられる探偵なんて、世界広しといえどキミくらいのモノだ」

「うううウルサイわねっ、用がないならトットと帰ってよっ！」

「コーヒーが出るのを待っているのだが、どうせ客以外には出さないと言うのだろう」

事務所でバスローブからチラチラと谷間が覗けるマヒナを放つといて、懷から二本の缶コーヒーを取り出す赤井刑事。カフェオレ缶をテーブルに置いてブラック缶を開けると、ほぼ一口で一本飲み干した。

「キミに話しておく事が三つある。一つ目は最近、新興ヤクザ『殴狼会』おうろうかいが怪しい取引を

掌の汗とペニスの汗が混ざりあい、しつとりとした熱硬い手触りが感じられる。生々しさを想像させる性の感触に、女の身体は奥深くで焦れたいような熱を持たされ始めていた。強気な瞳に焦りが現れ始めると、獲物女を観察していた若頭は再び顎で命令を下す。マヒナは左右から勃起を握らせるチンピラたちの脚で大きく腿が割られ、正座をしたまま左右に開脚をさせられた。

「ひゃ——何するのよ……っ！」

膝丈のタイトスカートが脚の付け根まで大きく捲り上げられて、生脚や純白の下着までもが露わにされてしまう。正座姿勢でスカートの裾が食い込む腿は、ムッチリとした肉感を持って汗浮く柔張りを見せている。正座と開脚腿で目一杯引かれた下着は女の柔肉に強く張りつかされていて、暖かそうな恥丘の膨らみや媚肉合わせ目の柔筋をうっすらと浮かせていた。

「下着も露わに男根奉仕か……探偵のする事じゃねえなあ、んん？」

「な、なによっ、こんな……っ！」

負けじと反論する声が羞恥で僅かに震える。左右から突きつけられた勃起に両掌で奉仕をしながらも、若頭を睨みつける強気な私立探偵。女の反抗を樂しむヤクザが更に命令を下すと、マヒナは背後からの新たなチンピラの掌によって、純白ブラを引きちぎられてしまった。

「きゃん……ちよ、ちよつと……っ！」

ブラの真ん中と肩紐をナイフで切られて、完全に奪い取られてしまう。締めつけから解放された白い双乳が、自由を謳歌するかのようにタツプりと揺れて柔らかさを魅せる。思わず閉じようとした脇を無理矢理開かれ、更に身体を隠せないようにワイシャツの裾がスカートの背中に詰められてしまうと、マヒナの豊乳は完全に露出させられてしまった。

「ほほう、いい身体だなあ……探偵なんかやめてA V嬢にでもなったらええのに」  
「——うる、さい……！」

言われ慣れている侮辱を受けると、やはり頭に血が上る。

スーツもスカートもワイシャツもはだけられた開脚正座姿勢で、純白下着を露わにさせられ双乳までも露出させられて手淫奉仕をさせられている、豊乳女探偵。

左右の奉仕に合わせて、剥き出しにされた九十六センチGカップの白い柔乳がタプタプと揺れて、上気する強気な表情と相まって下司な男たちを楽しませてしまう。

（イヤらしい、目が……っ！）

顔や乳房や、下着に包まれた股間が男たちに視姦されてしまうと、淫らな視線が物理的な刺激として突き刺さってくる。身体が更に熱を上げて鼓動が早められて、背中や乳肌にかけて汗が浮いてきた。

背後からブラを奪ったチンピラに頭を取られて右斜め上に向かされると、一際肉傘の太

い勃起肉が背後から突き出された。

「オレのは口で咥えろや、おら早く」

「ま、待っ——んぶう、んん……っ！」

抵抗の言葉を吐こうとしたサ克蘭ボのように艶めく唇に、ヤクザ者の汚性器がねじ込まれる。ゆで卵みたいな大きさと弾力と肌触りを持った野太い先端肉に、唇から歯、舌から上顎を擦りつけられながら、喉奥まで一気に口内侵略をされてしまった。

「んぐうつ……ふやめへ——あんぐむっ！」

男性器で口を犯されるという、嫌悪と衝撃と屈辱感。唇陵辱から逃れようともがく女探偵は頭を押さえられて、更に根本まで深々と含まされてしまう。焼け鉄のような熱を持った太厚い牡肉に頬内粘膜や咽頭部までも押し擦られると、ペニスの放つ牡の性臭が唾液に溶けて口内が汚されてゆく。

食事と同じく異物の侵入に反応した口内では、次々と唾液が溢れさせられる。更に牡勃起が唾液まみれになり、汚臭が混ざった唾液は上向きの喉に溜められてしまう。

（く——臭いいっ！）

痛んだ卵黄とイカが粘って混ざったような生臭さに、鉄分が含まれた熱のニオイ。血を求める牡の原始本能と性欲だけを混濁したような、牡の生性臭である。

タツプりと牡汚臭の溶け込んだ自らの唾液で口内がネットリと満たされる。牡臭の抜け

た鼻腔はアツという間にニオイ責めにされてしまい、脳の中までが穢されてゆくような錯覚さえ感じさせられた。しかし――。

とくんとくんとくんとくん！

――！ な、なに……あたまで……っ!?)

屈辱的な汚辱行為の筈なのに、牡の性臭で刺激された脳裏は気怠いような痺れる感覚で思考力が低下させられて、心臓は熱を帯びた鼓動で早鐘を打つ。口内の味覚で感じさせられる屈辱の味は、不味い卵白と汚れた海塩と鉄の粉を混ぜ合わせたような、お腹の底から嘔吐感さえ湧き起こる生臭い苦不味さ。

今にも吐き出してしまいたい汚辱牡肉なのにお腹の底が異様に熱せられて、唇はまるで熱棒に引きつけられてしまったかのように締まって離れない。抵抗の弱まった獲物の頭に手を添えたまま、三人目のチンピラは自ら腰をゆつくりと前後させ始めた。

つつちゅ、つゅぷう……んちゅる、くぷぷ……。

「へへ、なかなかいい感じの口じゃねえか、もつと吸って締めつけな」

「んん……ちゅうう……んちゅ……」

（口が……勝手に、吸いついて……!）

負けん気の強いスーツの女探偵は、自身の肉体反応に驚愕させられていた。嫌悪する不潔なチンピラのペニスを、掌や口で奉仕させられる屈辱行為。なのに身体は怒る理性を無

視し、媚熱を持って脱力感に蕩けて、牡の性暴力を受け入れ始めているのだ。

催淫スプレーを受けて性熱を持たされた身体が、牡の性熱を教えられて一方的に従わされてゆく。

（こ、こんな……ことって……）

上気する頬に力を込めて、閉じられそうな重い瞼を必死に釣り上げて抵抗の意志を見せる女探偵。上を向かされて剥き出しにされた白い喉から、窪んだ鎖骨に汗が流れた。

「んや……ふやめへよ—— あんぶ……！」

頭の前後動と奉仕する両掌の動きで、露出させられた二つの汗浮く豊乳が更に複雑な揺れで不埒な男たちの目を楽しませる。スーツの下で乳房を剥き出しにされたまま、強制奉仕のセミロング探偵は尚も下から強気に睨み上げる。

「いい目だなあ、気の強い女に啞えさせるつてのは堪んねえぜ」

「おらおら、啞えるのがイイからって掌の方もお留守にすんなよ、ケッケケ」

「ん……ぐぐ……」

すりすり、しゅりゅしゅ……くちゅぶ、んくんく……。

従うしかないとはいえ、男性を知らない女の身体が、初めて教えられる牡の熱と堅さと力強さに圧倒されてゆくのが止められない。このままでは——。

（こんな男たちに……からだが、慣らされて……いやよ……っ！）

牡肉に犯されて性神経を刺激された腸壁が、強姦熱勃起を愛しい主のように熱抱きに締め濡れ奉仕を開始した。

マヒナの意志は完全に無視をされて辱められて、下半身から全身制圧をされてゆく。

「ウヒヤッ、この肛門チンポに吸いついて来やがったぜ。こりや堪んねえや」

女探偵の前後孔を犯すチンピラ二人は、肉傘裏まで擦るような密着粘膜の濡れ締めつけに射精欲求を刺激されて、遂に腰抽送を開始した。

ずっちユづぢゅッぷつ、ずちゅぶヂュとぶちゅつ！

むりゅつゆうつツプゆゝつ、つぷプぷつつゆむりゅづつぷつ！

「ひか——ひあはあああああつ……っ！ あ、あそこつ、オシリ……いやはあああああつ！」

大切に恥ずかしい双孔を同時に犯されて、強すぎる男性器の熱圧迫感で下半身そのものが熱碎きにされる。過敏性感帯にされた肛門と膣媚孔、更に媚弱な子宮口を熱勃起で交互に肉突き責めにされると、激しい熱甘電で背筋の性神経が焼き上げられて脳神経までが熱痺れにされてしまう。

二人の強姦者による突き上げで汗肢体は上下に躍らされて、九十六センチのバストがタフタフと揺れる。天使の輪を綺麗に浮かせるセミロングの髪も、肉体の悩乱動に合わせて広がり靡く。

背後のチンピラにリンスの行き届いた髪を乱暴に掴まれて、節くれ立った淫勃起に巻き

つけられる。

「オレはこういう綺麗な髪が好きなんだ」

髪を使われての勃起奉仕でサラサラヘアが穢されながら、前後する男の腰で牛肉の先端がマヒナの頭皮に直接押しつけられ始めた。

すりしゆりスゆりリ、しゆつシユつスユる、とつんとつん。

「かやはつ……髪つかミいいつ——きたないの巻ひちや、ひやらはあぁっ！」

後頭部に感じる熱と、ツルツルして堅さを持った柔らかい弾力。強姦勃起で直接頭を突つつかれると、頭の中まで直接犯されてしまうようなおぞましさを感じ、しかし頭皮の神経までもが性感帯へと染め上げられてゆく。

更に扇情的に揺れ弾むGカップ柔白乳も、強姦チンピラには見逃してもらえなかった。騎乗位で犯す男を跨いだ傷持ち若手の先太い黒牡肉を双乳谷間に挟み込まれると、左右から柔バストを掴まれて上下に揉み廻されながら目の前抽送を見せつけられる。

「オホおつ、バツチリ挟めらぁ。やつぱ巨乳女はパイズリに限るよなぁ」

たぷりつムニゆたぶ、ぷるつチュたぶつぶゆつもつちゆモツチュっ！

「おオッパイいやっ——あつ熱ひいっ……むねえ、ムネ離ひてええっ！」

タツプリと実った双巨乳を征服されると、皮膚の薄い谷間に牡特有の太厚い勃起脈動が熱伝されてしまい、呼応するように女体の心臓鼓動が早められてしまう。目の前で柔らか



い谷間から見え隠れする黒男性器を見せ付けられて、パニックを起こした理性が更に焦燥へと追い立てられてゆく。四人の男に閉じ込められて全身を好き勝手に舐<sup>ね</sup>られる、半裸姿のセミロング女探偵。弱々しく抵抗する姿は女特有の艶を見せて、更に残るチンピラたちの獣欲にも火を付けてしまう。

「柔らかなエロい身体だ、俺たちにも犯させろや」

そう言うとかメラを持ったまま、更に三人の男たちがエモノ女探偵の犯される媚肢体に群がってきた。

左右からそれぞれ両掌を捕られて曲がった勃起を握らされて、更に右斜め前からのカメラチンピラには太いながらややネジれた男性器を頬に押しつけられて、サクランボ色の唇を割られて無理矢理含まされてしまう。

「んむうっ……やつやめ——んぐふっ……もうひいやは——んぐっんくうっ！」

「おらおらあ、柔らかい掌でしっかり擦れあつ」

「へへっ、熱い口の中にタツプリと射精してやるぜえ」

しゅりシュリすりり、すしゅスシゅすゆるる。

ぐぶつつゆずぶぐぶゆちゆつ、くぶつチャクプぶぶむぐつ。

勃起熱肉を握らされた左右の掌は、一度教えられた男性器への奉仕を素直に始めた。脈打つ熱血管の起伏で、掌の性神経が灼かれてゆく。上を向かされて犯される濡れ口内はペ

ニスの弾力や大きさ、ニオイやニガ味によつて支配をされて、顔の内側から鼻腔や脳が勃起の熱臭で蒸し焼きにされてしまふ。

「んぐふっんむふうううううううう……っ！ ひやむえへっはふむふやあっ！」

全身の性神経が容赦なく、暴力的なほどの淫熱快楽で為す術もなく灼き上げられてゆく。肉と熱と牡のニオイで全ての媚孔を犯されて、快楽強姦に服従させられてしまった柔媚肉体。更に強姦者たちの肉命令に忠実に従う女体によつて、女探偵の理性は性快楽の粘沼へと確実に踏み沈められてゆく。

強気な瞳が濡れ揺らぎ、マヒナの理性が埋没寸前にまで追い詰められた時、女体を貪る強姦チンピラたちは射精に向かつて抽送速度を一気に上げてきた。

「もう堪えられねえっ、これから目一杯出すぜ出すぜええっ！」

「オレもだっ……出してイかしてやるぞっ、そらそらあっ！」

すゆりしゆりユスリゆつとつんッ、かぷくプアむくぷゆうっ！

しゆしユつすりりシユつしゆりつりしゆつ、むぢゆつつゆむりユゝつきゆムつゆっ！

たぷプムプルむゆつつ、ずぶゆプゆるづッぶちゆつぎゆぶジュむちゆっ！

髪が、両掌が、口内が、双柔乳が、肛門が、子宮が、それぞれ形やニオイの違う強姦勃起で力強く突き込まれて、全身の性神経が知らない性の頂点へと叩き上げられてゆく。

「びゃんんんっ——んくっんはぶあっ……ひやめくりゆっ——あつくっ、んはあああっ……

…イ、イ、いく、いく、ヒッはおひやらやあああああ…っ!!」

複数人性交という許容量を超えた性快楽を脳は受け止めきれず、呂律が廻らなくされた舌は意味不明の言葉を吐かせられる。手足の先から熱感を失ってゆくのに、両掌は勃起の起伏や熱が一方的に教えられて、快楽の記憶として女の脳へと刻み込まれてしまう。上下される肉体は淫熱を上げさせられ汗を纏わされ性灼きに炙られて、視界が激しく白光に包まれて思考力は完全に奪いさられてゆく。

強気な理性が強姦性快楽の沼にどうしようもなく沈められてゆく事は、もうマヒナにはどうにも止めようがなかった。

肉体感覚の全てが重力感を失い、脳内は完全な白光に包まれてゆく。見開かれた瞳から大粒の涙がこぼれ始めた時、全ての強姦者ペニスが限界まで引かれ、そして一気に全力の突き込みで女体へと押し込まれた。

「射精してやるぜえっ、もうお前の身体はオレたちのモンだああっ！」

つつづドムツツズちゅンンンつつ!!

「——っ!!」

その瞬間、集団強姦陵辱を受けた女探偵マヒナは、脳が白光痙攣するほどの性快楽の頂点へと叩き飛ばされてしまった。

「ひぐんんんつつっつつ!! んふやはあつつ、いつひいつ…っいひやあああああ

あああああつつ!!」

肉体が締められるかのような一斉突き込みを受けたと同時に、胎奥の飢餓風船は肉体そのものが爆散するかのような衝撃で破裂をする。全身が硬直し震えて仰け反って、一瞬で桃色に染まり汗を散らす。両掌が握られて熱腔と腸壁が強く喰い締まり、不埒な強姦勃起を抱きしめながら快感を送る。

そして抱き愛撫を受けたペニスたちが一斉に弾け、エモノ女体の肉体へと快楽射精を放ち始めた。

びゅぶユウうつびユつびユぴゅゆつつ、ぷじユびゅうううううつつ!

どプつぶつドクぶつ、ブつぶぶゆブぴゅッぶゆつ、びゆるルつどろぶびゅじゅうつつ!!  
「んぐくつ——かはっあふつ……ひゃ、ヒャヘイ……ひんっひんん……クヒもつてもおっ——アヒヨコもひつぶあい……あんっ、ふひゃはあん……っ!」

栗色の髪間から白い精粘液が染み出すようにこぼれ、毛根や頭皮が汚濁に埋められてゆく。口から外れた勃起には愛顔の鼻筋や頬を穢されて、唇から垂れる白濁液が高い粘度を持って顎ラインへと流れる。精液からは卵とイカを混ぜたような生々しい牡の性臭が漂って、犯された女探偵の鼻腔から脳神経が淫臭痺れにさせられていた。

射精をされた両掌では受け止めきれないほどの大量精液が手首から上着袖へと流れ込み、ヒジから脇腹へとネットついて汗肌と上着が濡れ密着をさせられる。牡液の噴射をされたG

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**